退職者へのメッセージと近況

☆中村　正博さん
定年退職のみなさん、長い間御苦労様でした。
これからの人生を一杯楽しんで下さい。

☆笹岡　冨美さん
また沖縄に行きます（3月19日～1ヶ月）。たまには「でてこういや!!」と怒られそうですが……?!
体調もずいぶん良くなり、新婦人・退婦教・医療生協、ウォーキング、地域の人たちとの体操など、地味に頑張っています（?!）。退職して7年目かな。月日のたつのはほんとに速いと実感しています。皆さん、元気でがんばって下さいませ。

☆池上　圓さん
退職して4年。初孫ができて守りで忙しい毎日をおくっています。申し訳ないですが、今回はお祝いに行けません。
退職されるみなさんお疲れさまでした。仲間とともに楽しく！おもしろく！

☆市川　幸煇さん
何かと達者で過ごしています。

☆高橋　正さん
残念ですが失礼いたします。医者通い、○○に翻弄されながら、日々を過ごしております。少しだけ文化的ボランティア活動をさせて戴いております。ご盛会をお祈り致します。

☆小松　安子さん
◎ボーとしているうちに一日が過ぎていきます。

☆安岡　久寿一さん
いつもお世話になっております。体調が悪いため参加できません。

☆田上　悦子さん
専門学校に週1回通っていましたが、この三月で二度目の定年退職となりました。楽しく勤めていたのですが、それでもホッと自由な気分もしています。この時期はミャンマーを訪問しているので、会は欠席させてもらいます。

☆大川　佐智さん
新加入の先生方、おめでとうございます。子どもたちのためにがんばってください。
退職組合員の皆様、長い間本当にお疲れさまでした。これからの人生をご健康に気を付けながら、めいいっぱいお楽しみ下さい。

☆河村　幸恵さん
連絡ありがとうございました。盛会でありますように。最近は体力がなくなり、何をするにも、ひまがかかるようになりました。

☆川上　矩顕さん
自宅の住所や電話番号をすぐ忘れてしまって苦労します。両者の区別がつかなかったり。

☆土居　修さん
当日は加藤菊先生を囲み米寿を祝う会と重なっています。申し訳ないことです。

☆岡本　肇さん
ごめんなさい。別の飲み会が入っているので。

☆古谷　守則さん
高齢のため入退院のくり返しです。

☆岡崎　ゆかさん
元気ですよ～!!

☆矢野川　瀧男さん
ご案内ありがとうございました。
3月30日は、生涯学習の授業があり、残念ながら出席できません。誠に申し訳ございません。よろしくお願いいたします。

☆永田　和子さん
老母を見送りまして、安堵いたしました。
皆様のご活躍を拝見して、はげまされる思いです。

☆中山　伯奈子さん
歩行が困難ですので、失礼いたします。

☆松田　雛子さん
今、4月15日で92歳になりますが、参加行事に参加ようしない身になり申しわけないです。

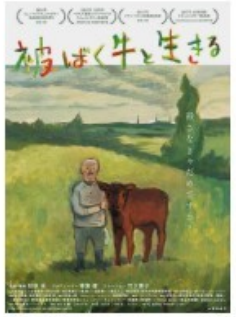
☆鎌田　伸一さん
県議選の任務の為、欠席します。
盛会を祈念します。

☆井上　徳治さん
高齢になって来ています。

福島原発事故、私は何を知っていたのだろう。いや何も知らなかった。

ドキュメンタリー映画　「被ばく牛と生きる」

飯田清久



福島原発事故、私は何を知っていたのだろう。いや何も知らなかった。
映像は、牛舎に繋ぎ止められたまま餓死した牛たちのミイラ化した姿から始まる。事故直後、家畜は畜舎に閉じ込めて避難するよう各町村は指導した結果である。
伝統行事・相馬野馬追に欠かせない存在の馬はすぐに救出された。また、ペットである犬や猫は、動物愛護団体の強い要望もあり、多くのボランティアがレスキュー活動を行った。一方で、事故から2か月後、当時の原子力災害対策本部長（内閣総理大臣）は、警戒区域で生きていたすべての家畜の安楽殺処分を福島県に通達し、多くの畜産農家が苦渋の思いを抱えながら同意書にサインすることとなった。
そしてその1か月後、相馬市のある畜産農家が自ら命を絶つ悲劇が起こった。

殺処分に同意しなかった数件の畜産農家は、「ピーピー」と放射線量計が危険を知らせる居住制限区域や帰還困難区域で暮らしあるいは足を運び、牛の世話を続けている。食用にできない、売ることはできないことはわかっていても、暗償金を取り崩してでも牛の世話を続ける人たちがいる。
自らは被ばくのリスクを抱えながらどうしてそこまでするのかと思いが、観る者の脳裏に浮かぶ。
「牛は家族と同じ」と手塩にかけて育てた牛たちの殺処分という命の重さの違いに同意できない畜産農家、安全神話を信じ込み原発を推進してきた浪江町のある元町会議員は「牛を生かすことは故郷を守ること」の信念を貫く、原発事故の生き証人である牛を生かし続け「被ばく牛」の殺処分は、故郷を追われた住民に対する棄民政策につながる」と訴える畜産農家。原発事故とは戻れない厳しい現実と向き合うそれぞれの思いと生き方を、映画は鋭くそしてせつなく伝えていた。「国の言いなりになってたまるか」の声が鋭く心に突き刺さる。

岩手大学を中心とした東北地方の大学研究者たちが「大型哺乳類による長期の低線量被ばくの経過観察」をテーマに調査研究活動を続けている。
被ばく牛を生かす唯一の道である。しかし、国はこの研究には必要性を認めず予算をつけようとしない。しかし農家と研究者たちはあきらめない。
オリンピックを誘致する際首相は、原発事故は「アンダーコントロール」と世界に向けて言い放った。そして、除染や避難解除など復興のイメージアップがことさら宣伝される昨今、あらためて、原発事故がもたらす取り返しのつかない現実、終わることのない放射能被害の実態を厳しく告発する重厚な作品であった。